

瀬戸内海における藻場の現状と今後の可能性

—瀬戸内ブロック青年部組織編—

徳島県農林水産部水産振興課

多田 篤司

開催日時：令和7年10月25日（土）14：00～15：00

開催場所：ザ グランドパレス 徳島（徳島県徳島市）

出席者数：47名

対象者：瀬戸内ブロック漁協青壮年、徳島県漁業関係者、徳島県自治体関係者

講演名：瀬戸内海を中心とした藻場の現状と今後の可能性

講師：国立研究開発法人 水産研究・教育機構

水産技術研究所 漁場生産力グループ 島袋 寛盛 氏

1. 緒言

瀬戸内海は「里海」と呼ばれ、人の手が加わることで豊かな生態系が維持されてきた歴史があり、その中心にある藻場の重要性は広く知られている。藻場は多くの水生生物の生活を支える「海のゆりかご」としての役割や、二酸化炭素の吸収や水質浄化等の役割を果たしており、瀬戸内海海域の漁業と密接に関わっている。

近畿・中国・四国地区漁青連ブロックでは、年に1度のブロック会議にあわせて、会員のスキルアップや漁業に対する理解を深めるため、研修会を開催している。令和7年度は漁業者からの関心が高い、瀬戸内海海域の藻場の現状や今後の藻場との関わり方について学ぶため、研究現場の最前線で全国各地の藻場と向き合ってきた、国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産技術研究所 沿岸生態システム部 漁場生産グループ 島袋 寛盛 氏にご講演いただいた。

2. 研修会の概要

研修会は、令和7年10月25日（土）に徳島市内の会場で行われた「令和7年度近畿・中国・四国地区漁青連ブロック会議」内の記念講演として開催した。

参加者は、瀬戸内ブロック漁協青壮年、徳島県内漁業者、自治体関係者47名であった。島袋氏には、藻場の定義から始まり、瀬戸内海を中心とした全国各地の藻場の現状、これからの藻場との向き合い方について、興味深く、大変分かりやすい講演をしていただいた。特に、藻場の極めて高い経済価値（生態系サービス）を維持するため、まだ藻場があるうちに新たな価値を創出する重要性が示された。

講演後は時間の許す限り、参加者との意見交換や質疑が行われた。

3. 講演の内容

「瀬戸内海を中心とした藻場の現状と今後の可能性」 (島袋 寛盛 氏)

(1) 海藻・海草・藻場の定義

海藻はワカメ、アラメ、カジメ、ホンダワラ類等、海草はアマモ等、これら海藻・海草が群落を形成している場所を藻場といい、「海中林」とも称される。

(2) 藻場の現状と推移

環境省の調査データによると、瀬戸内海における藻場面積は長期的には微増していたものの、直近数年で急激な減少が確認されている。

また、カジメ類が減少し、より暖海性のホンダワラ類に置き換わることや、本来は多年生であるアマモが単年生になる等、藻場の質も変化している。

(3) 藻場衰退の要因分析

藻場がなくなる要因は複合的であり、特に海水温の上昇を背景とした影響が大きい。

要因	割合	備考
ウニの食害	26%	藻場がない状態を維持
魚の食害	21%	アイゴ等の植食性魚類による食圧
海水温上昇	21%	生理的な限界
濁りや堆積	11%	光合成の阻害

第3版磯焼け対策ガイドライン（令和3年）より作成

水温の上昇に伴い藻場分布域は北上すると考えられるが、実際の海藻分布はそうになっておらず、多くの空白地帯が生じている。また、流動環境による光合成促進や浮泥除去の有無なども、藻場の衰退要因の一つとして考えられる。

(4) 藻場の価値と生態系サービス

藻場は地球上の生態系の中でも、トップクラスの経済価値を持つとされている。食料生産をはじめ、「風が吹けば桶屋が儲かる」ということわざのように、「藻場ができれば人が儲かる」仕

組み（共通認識）づくりが大切と島袋講師のお言葉があった。

4. 質疑応答

講演終了後、参加者から活発な質問が行われた。（以下は、抜粋）

・ 近年よく耳にするブルーカーボンはもうかる仕組みなのか。

⇒ ブルーカーボン創出のための活動（藻場造成）を通じた副次的な影響（魚介類が増える、漁場環境が改善される）により収入を得ることが大事。

5. 謝辞

○講師の島袋 寛盛氏には、大変お忙しい中、貴重なご講演をいただき、厚く御礼申し上げます。



島袋 寛盛氏の講義



会場の様子